大学院コンサートシリーズ・名手と共に

「青柳晋氏を迎えて」交流演奏会

with東京藝術大学

L.v.ベートーヴェン(リスト編)

2台ピアノによる交響曲 第9番 ニ短調 op.125

第1楽章　青柳 晋 × 石津 若葉 (洗足学園音楽大学　大学院2年)

第2楽章　青柳 晋 × 間世田 采伽 (東京藝術大学　大学院2年)

第3楽章　青柳 晋 × 橋本 和磨 (洗足学園音楽大学　大学院2年)

第4楽章　青柳 晋 × 池内 亮 (東京藝術大学　大学院3年)

2020年11月7日(土)

17時開演(16:30開場)

シルバーマウンテン 2 階

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

■曲目解説

●ベートーヴェン 交響曲第9番 ニ短調 作品125

ベートーヴェンは生地ボンにいた時からすでに、シラーの「歓喜に寄せて」に作曲したいと思っていたらしい。1798年の作曲スケッチ・ブックには、この長い詩の一部が旋律とともに書かれている。また1812年のスケッチには、詩の初めのことばのみが書かれている。

1822年に交響曲の作曲依頼状が届いたことをきっかけに、今までベートーヴェンの頭の中に断続的に浮かんでいた構想を一気に実現に押し進め、1824年頃に完成した。「歓喜」の作曲の意図を抱いた時から完成の時までを通算すると、約30数年にわたる。

○第1楽章(ソナタ形式)

第3音のない和音で空虚な響きのする神秘的なトレモロにのって、主題の断片が秘かに繰り返され、その頂点でユニゾンで第1主題が全貌をあらわす、という前代未聞の手法で曲が開始される。第2主題は第1主題とは対照的に楽しい性格のものとなっている。時折第1主題の部分を交えながら、展開部へと進む。再現部は、主題の形やその繋ぎ方が初めの提示部とかなり異なっている。結尾部もこの楽章全体の長さに比例して長大である。

○第2楽章(三部形式)

この時代の交響曲において、第2楽章は歌謡的でゆったりとしたテンポのものが多いが、ベートーヴェンはこの交響曲で初めて、その原則に従わずにテンポを著しく速くした。

第1部と第3部は第1楽章を受け継ぐようなデモーニッシュな性格であるが、中間部は牧歌的な平和な世界であり、第4楽章の「歓喜に寄せて」を予感させるものとなっている。

○第3楽章(変奏曲)

前の2つの楽章とはあまりにも異なる性格を持った楽章。Adagio と Andante の2つの主題をもつ自由な変奏曲となっている。この天国的な楽想は、作品130の第5楽章「カヴァティーナ」のような、後期弦楽四重奏曲の緩徐楽章を彷彿とさせる。

○第4楽章(変奏曲)

この楽章は、激しく凄まじい奇怪な騒音で始まる。この騒音は、レチタティーヴォ風の低音によって何度か中断されながら、第1楽章の冒頭、第2楽章の主題の断片、次いで第3楽章の第1主題の最初の旋律が振り返られる。

「歓喜に寄せて」の主題は3回変奏され、次第に厚みと色彩感が加わっていく。次いで再び乱奏があり、バス独唱が、ベートーヴェン自身の書いた句「おお友よ、これらの音にではなくて、もっと快いものに声を合わせよう。もっと喜ばしいものに」を歌い始める。それから、歓喜の主題がシラーの詩によって歌われてゆく。そして合唱も加わり、歓喜の世界がくり繰り広げられていく。第7変奏で行進曲風になり、ついで宗教的になり、その次に2重フガートとなる。最後に「歓喜よ、美しい神の閃光」を高唱して力強く曲を締めくくる。

■出演者プロフィール

石津　若葉（いしづ　わかば）

2010年までヤマハマスタークラスピアノ演奏研究コース在籍。洗足学園音楽大学ピアノコース(ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンス・クラス)を首席で卒業、併せて成績最優秀賞を受賞。現在、同大学大学院音楽研究科修士課程2年在学。ピアノを浦壁信二氏、和声学、対位法を平井京子氏に師事。

間世田　采伽（ませだ　あやか）

宮崎県出身。東京藝術大学音楽学部附属高等学校を経て、同大学音楽学部器楽科を卒業。卒業時に藝大クラヴィーア賞、アカンサス音楽賞、同声会賞を受賞。現在、同大学大学院音楽研究科修士課程 2 年在学。ピアノを有森博氏に師事。

橋本　和磨（はしもと　かずま）

熊本県出身。ルーテル学院高等学校芸術コース音楽専攻を経て、洗足学園音楽大学音楽学部ピアノコース卒業。現在、同大学大学院音楽研究科修士課程2年在学。ピアノを清水将仁氏に師事。

池内　堯（いけうち　たかし）

第15回ウエスカ国際ピアノコンクール第2位(スペイン)。東京藝術大学を卒業後、チャイコフスキー記念国立モスクワ音楽院研究科修了。大学卒業時に藝大クラヴィーア賞、アカンサス音楽賞、同声会賞を受賞。現在、東京藝術大学大学院音楽研究科修士課程在学。ピアノを津田裕也氏に師事。

青柳　晋（あおやぎ　すすむ）

ニカラグア生まれ、米国で 5 歳よりピアノを始める。日本に帰国後、全日本学生音楽コンクール全国大会で 1 位受賞。桐朋学園大学在学中に西日本音楽賞を受賞し、ベル リン芸術大学に留学。1992年ロン・ティボー国際コンクールに入賞後、パリ日本大使館、ラジオ・フランス、旧西・東ドイツ各地からアメリカに至るまで各地で演奏活動を展開。ハエン、アルフレード=カゼッラ、ポリーノの各国際ピアノコンクールで 1 位受賞。1997年頃より日本でも演奏活動を開始し、2000 年には青山音楽賞を受賞。第 28 回日本ショパン協会賞受賞。これまでに7枚のソロアルバムをリリースし、いずれも高い評価を受けている。2006年よりリスト作品をメインに据えた自主企画リサイタルシリーズ「リストのいる部屋」をスタートさせ、今年は15回目を迎える。国内外のオーケストラとも数多く共演し、著名アーティストから の信頼も厚く、近年は室内楽奏者としても活躍の場を広げている。2012年3月カーネギーホール・ワイルリサイタルホールでデビュー公演、現地メディアで絶讃を博す。コンクール審査員としても経験を重ね、日本音楽コンクール、東京音楽コンクール、ハエン国際コンクール審査員などを歴任し、高松国際ピアノコンクールでは第 1 回目から審査に参加、現在副審査委員長として同コンクールのプロデュースにも携わる。東京都交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、九州交響楽団など全国の主要オーケストラと協演。 これまでに宇賀田克子、藤村佑子、山田富士子、山田康子、ジョー・ボートライト、リリー・クラウス、クラウス・ヘルヴィヒ、パスカル・ドゥワイヨンに師事。東京藝術大学教授、洗足学園大学客員教授、札幌大谷大学客員教授、長崎おぢか国際音楽祭音楽監督を務めながら幅広く演奏活動を継続中。

オフィシャル・ウェブサイト http://www.susumuaoyagi.com/